うで、きたない便所や暗い台所では住みよいとは言えず、子供も年ごろになると恥ずかしさを覚え、これではさっさと都会に出て行くのが当たり前です。

ゆとりのある生活とは、経済性の豊かさとともに、文化的な生活環境が不可欠であります。隊員の中には、豪華な農業機械をちょっぴり我慢して、台所の改修やトイレの水洗化に着手する事例も出てきました。「生活環境をもっとよくしよう」「こうした考えが波及することが「奥阿蘇てんぐ隊」の希望でもあります。

「てんぐ隊」に関する我々のもうひとつの活動にも触れておきます。

村も城ケ岳を「天狗の里」に

南阿蘇はもともと、観光資源が豊かな環境にありますので、こうした農村では「農業＋観光」に積極的に取り組むべきであります。しかしながら、両併地区にはこれといった観光地がありませんでしたので、八九年から「城ケ岳」の整備を手がけました。「城ケ岳」は南外輪山の小高い山。

南阿蘇が一望できるこの地には昔、「市下城」という山城があり、伝説的な話も語り継がれ、両併地区の史跡として私たちの誇りとする山であります。

ここは整備以前は、とても登れるような山ではなく、荒れ果てていましたが、我々部員が数日がかりで草木を切り倒し、道を造り、今では簡単に登れるようになりました。毎年二回の整備作業を続ける一方、環境庁の公園課や、役場の観光課にも相談に行きました。そのかいあって、九四年には、村観光課でガイドラインが作成され、「天狗の里」というイメージで開発されることになったのです。「城ケ岳」の頂上には天狗の鼻をまねた大きな腰掛け、牧野には休憩所、道しるべ、県道わきに自由市場などが作られる計画です。

自由市場には、地区で生産される農産物の即売所はもとより、農産物の加工、加工体験、食事、また運営には老人会の協力が必要ですので、ゲートボール場の併設など、観光施設だけではなく、地域の人々のより所として、我々を中心に具体的施策が討議されています。

講堂を移築してライスセンター

職業としての稲作を考えた時、生産基盤の整備と規模の拡大は避けて通れないことなのですが、雇用条件が悪い農村にとって、安易な規模拡大は過疎に直結します。総合的、かつ段階的に進めなければなりません。そこで我々は平成五年に、生産性の向上を目的に、農作業の受託事業を行う「南阿蘇おあしす米生産組合」の活動を始めました。農家である我々が、企業的センスを身につけるのが隠された狙いです。ちょうどそのころ、両併小学校講堂の新築計画がありましたので、この講堂を地域のためのライスセンターとして残そうとしたのがきっかけです。

これまで我々農家は、補助金に頼り過ぎていたのではないかという反省に立ち、百％自己資金で建設。できる限り手持ちの機械を持ち寄り、建設作業も部員が交代制で、しかも夜間作業を中心に進めました。解体、移動、設計、建設と順調に進み、当初、「無理だろう」と思っていた部員も完成の際は「やればできるじゃないか」と感激したものです。

昨年は冷害による収量減の中、計画の千五百俵（六〇㌔玄米）に対し、三千俵の成果を上げることができました。乾燥・調整作業は交代制で行い、昼間は四、五人の男性が稲刈り、休日や夜間は兼業農家を中心に籾摺り作業、最盛期にはご婦人方の協力による終日の籾摺りと、無難に消化することができました。平成六年は育苗・代かき・田植えと順調に実績を伸ばしています。

両併地区は水田条件が悪く、作業も大変です。いろんな農家（特に高齢者や機械がない農家）に請負作業に出かけるのですが、手を合わせられ感謝されます。中山間地の稲作は水管理や畦畔（けいはん）の管理に労力を要しますが、こうした作業は高齢者でも十分可能です。高齢者と若者が作業を分担し、土地条件をカバーする、こうした地域ぐるみの取り組みが、今後さらに注目されるべきではないかと痛感しています。